

1. 略歴

1987年3月	東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月	マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了 博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得 博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月	神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月	同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2016年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英語学/理論言語学

b 研究課題

程度表現の構造と意味

c 概要と自己評価

2016年度は科研費基盤 (C) の課題「日英語の程度表現の統語構造と意味」の2年目にあたる。計量単位語と自然数で研究の進展が見られた。

まず、計量単位語については、日数表現が準数詞扱いの「数」との組合せで「じつ」となり、全体としては「か/にち/じつ」の交替形を持つことから出発し、分類詞や計量単位語が数詞と結合する場合に大和言葉系統と漢語系統の表現の混在が厳密に禁じられることについての理論的考察を行った。演算メカニズムとしては、混在を禁じるフィルターが働くことで、形態実現の可能性を絞り込む結果になっていると提案した。この研究の副産物としては、例外的な音形をもつ漢語の数少ない例としてよく知られている「いち」、「しち」、「はち」、「にち」が、いずれも数詞ないし日数表現であることを確認したことが挙げられる。これらの成果は、*Societas Linguistica Europaea* 49 という国際学会で発表した。

自然数と数詞との関係については、前の科研課題のときから論文としての発表が持ち越しになっていたが、これまで見落としていたヒルベルトの自然数理解をあらたな提案の中で位置づけることにも成功し、また、発達心理学における直近の成果を批判的に取り込む形でまとめ、国際学術誌に発表した。基本的なアイデアは、句構造形成の演算操作を任意の単一の語彙項目に繰り返し適用することで自然数列に対応可能な集合列を作り出すことができる、というチョムスキーの提案の微調整であるが、任意の単一の語彙項目の代わりに空集合を使えば、数詞の言語分析に関して、数学で現在採用されているフォン・ノイマンの集合論的定義と直接比較して甲乙を論じることができるということが、本研究課題に着手してからの重要な展開といえる。

2017年度は、程度概念を内包している名詞が最上級と組合わされる場合に見られる日本語独自の現象を発見した。*big basketball fan* に対応する日本語の形が「大のバスケットボールファン」ように形容詞ではない修飾語を用いることをこの年度に出版された日本語の統語論についてのハンドブックの担当章において指摘しておいたが、そこからの展開である。日本語の形容詞のシステム、ひいては普遍文法での形容詞のシステムについて示唆するところも少なく、日本語の「大きい」と「多い」が歴史上関連しているというよく知られている事実や、英語の量子子 *most* に対応する「大部分」という日本語の表現が「大」を含んでいるという事態と相まって、個別言語の個別語彙項目の特殊性として従来片付けられていた事柄を理論的観点から分析していく端緒となることが期待される。2018年秋に学会発表の予定である。

また、日本語の名詞に可算/非可算の区別が存在することを立証した論文を仕上げ、オープンアクセスの国際学術誌に発表した。これは、上記の「大部分」という表現などについての分析がカギになっている。

d 主要業績

(1) 書籍章担当

Akira Watanabe, 'Attributive Modification,' in *The Handbook of Japanese Syntax*, ed. by Shigeru Miyagawa and Hisashi Noda, De Gruyter Mouton, 783-806 頁, 2017.9

Akira Watanabe, 'Measure Nouns and Numerals,' in *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, ed. by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama, De Gruyter Mouton, 477-505 頁、2018.2

(2) 論文

Akira Watanabe, 'Natural Language and Set-Theoretic Conception of Natural Number,' *Acta Linguistica Academica* 64: 125-151 頁、2017.3

Akira Watanabe, 'Division of Labor between Syntax and Morphology in the Kichean Agent-Focus Construction,' *Morphology* 27: 685-720 頁、2017.10

Akira Watanabe, 'The Mass/Count Distinction in Japanese from the Perspective of Partitivity,' *Glossa: a journal of general linguistics* 2(1): 98. 1-26 頁、2017.11

(3) 学会発表

国際、Akira Watanabe, 'Number Features and Numerals,' 49th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea、ナポリ (イタリア)、2016.9.3

(4) 予稿・会議録

国際会議、Akira Watanabe, 'Amount Relatives in Japanese,' *Proceedings of the Eighth Formal Approaches to Japanese Linguistics Conference*, 189-208 頁、2016.12

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

Linguistic Inquiry (出版元 MIT Press)、編集委員、2016.4~2018.3

Journal of East Asian Linguistics (出版元 Springer)、編集委員、2016.4~2018.3

the Language Faculty and Beyond (John Benjamins)、advisory board member、2016.4~2018.3

Acta Linguistica Academica、編集委員、2017.1~2018.3